

# 風 狂

第48号

風 狂 の 会

詩

津和野へ	出雲 筑三
7月プール開き	高 裕香
勇気ある者へ	高村 昌憲
諺辞典（二）	なべくら ますみ
飯盛女	長尾 雅樹
死んだ男	原 詩夏至

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十二）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

会議という名の無責任構造	神宮 清志
--------------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十四）	高村 昌憲 訳
-----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

萩から津和野への路線バスに乗る  
山陰のなだらかな山を越える七十六分  
客は最前列に座ったわたし一人

バスは畑をどンドン飛ばして行く  
二十分もすると 老婦人が乗ってきた  
これで乗客は二人になった

この車は萩には往かんのかのう  
ばあちゃん 逆コースじゃけん  
一時間も待ったのに間違えたんか

野や山がどンドン現われて  
どンドン萩は去っていく  
かなり走ってバスは道端に停まった

ばあちゃん バス停が見えるだろう  
あそこから戻りなさい  
金はいらんけえ

わしゃ耳が遠くてよう聴こえん  
いいから早く降りてくれ  
金はいらん と言ったろう

ばあちゃん 今度は気をつけや  
おばあさん 足許に気をつけてね  
ほのぼのとバスは峠に向かった

津和野か あそこは蒸し暑い処だよ  
この駐車場で五分休むけん  
お客さんが散歩から戻ったら出発するけん

7月に入るやいなや夏休みがやって来たような猛暑  
三鷹図書館のバス停前小学校からプールの歓声が上がる  
1オクターブ高い歓声としぶきの音が思い出を運んで来る

50数年前の大阪の小学校 プールは校庭  
クーラのない教室から解放され天国そのもの  
みな紺の水着、黄色い水泳帽、そして、大きなゼッケン

夏休みに入ると、10円プールが始まる  
スポーツ施設もなく、兄に連れられ毎日通いつめる  
ばた足、クロール、平泳ぎ、飛込までなんでもこい

家では、最新型冷蔵庫で麦茶が待っている  
おやつは、トウモロコシや棒アイス、かき氷---  
大きく切ったスイカにかぶりつき種を庭に飛ばす

子供がうんと少なくなった  
プールも室内プールが増え  
校庭プールの歓声やしぶきは私の宝物だ

恐怖とは目に見えないものを想像し  
本当の危険を見ない時に起きてくる  
見ることは見るのを望む強い意志  
怖いものを正視すると怖くなくなる

見ることは正しい判断力にも繋がり  
本当の正義を見分ける精神の源泉だ  
曖昧を許容する者の眼は不正に曇り  
非開示の中で正義を腐敗させる菌だ

服従を正義と錯覚する儂い時代の雨  
開示することは勇気ある行為である  
奴隷状態を潔しとしない自由を求め  
服従と尊敬を分離させる行為である

開示と自由を無鉄砲と受け取るなり  
非開示と服従が戦争の原因にもなる  
お互いに逢引きする様に性急になり  
幻の戦争を恐れて辛抱出来なくなる

勇気ある者は継続させる力を保って  
本当の危険を正しく判断できる者だ  
恐怖に震えた想像で幽霊に盲進して  
自らの結果と成果を捏造しない者だ

## \*鹿を馬と

登山道の深い奥を動くものがいた  
こちらを試すようにゆっくりと歩いて来る  
ちらりと見えた頭  
馬だ！

仲間の誰かが大きな声を挙げた

こんな所に馬がいるか  
鹿じゃないか 結構大きな鹿だ  
いやあれは 馬だ  
角がないもの  
物知り顔の爺さんが主張する

彼はいつもそうだ  
自分が正しいと言い張る  
違っている とうすうす気がついても  
意地を張る

馬と鹿 を一緒くたにして  
漢字で並べ  
馬鹿 と表記するのは  
両者にとって大変失礼である  
と いう説が起きた

だから ばか と書くか  
バカ と記すべきだ  
いや それらとは関係のない  
莫迦と書くべきだ

そんな莫迦げた話どこにある

馬鹿には

馬と鹿の迷惑そうな顔が浮かぶ

莫迦には

得体の知れない抹香臭さを感じる

やはり

馬鹿は馬鹿で良い

誰に向かうでもなく

ちょっと大きい声で

バカヤロウー

と叫んでみる

ふわりと 浮かび上がった笑い

かそけくも<sup>のど</sup>咽喉なる妹よ<sup>ほうせんか</sup>鳳仙花

富田木歩

赤い夕陽に さよならしたら  
峠の茶屋で 旅人姿  
一山越えて 国境い過ぎて  
乙女盛りの 胸は泣きもする  
年季の明けは 何時までだろうと

幼い心で しみじみ思う  
食うや食わずの 貧しい親子  
何んの因果で こんな苦<sup>せつちよう</sup> 勞をはぐ  
登る朝日に ちょっと願をかけて  
明日の食いぶち 別けて頂戴な

思い残して 故里を去る  
娘心の 痛々しさを  
天の恵みに そっと縋りつく  
売られた体は 異郷の土を  
覚悟を決めた 旅宿稼ぎ

借金の証文は 地獄の便り  
何を好んで 男の腕を巻く  
飯盛女の 黄色い声で  
旅路の宿は 極楽模様  
肌の褥に 汗散る涙散る

血を吐くほどに 稼いだ金は  
湯水の例えで 借金に吸い取られ  
女心の 情話を鬻ぐ  
死んだあの娘の 二の舞恐れ  
そっと噛み締める 唇も青い



故郷を思えば 懐かし嬉し  
あと数年の 年季が憎い  
男の胸にそっと 齒形を残し  
荒んだ夢の 意地を恨んで見る  
明日の生命は 誰が知るのやら

死んだ男が何故そこにいるのか  
少年は分からぬではなかったが  
さりとしてどうしていいかも分からず  
とりあえず目を合わせず行き過ぎる  
背後にまつわりつくその視線の圧  
それを振り切る由などないことも  
少年は分からぬではなかったが  
しかしもし歩を止め振り向けば  
一体そこから何が始まるのか  
死んだ男を少年は恐らく嫌いでない  
死んだ男も少年を恐らく同じだろう  
だがなら少年が男の視線に感じる  
この重圧はどこから来ているのか  
やがて行く先に何やら灯りが見え  
その暖光の下に何やら翳りが濃く  
見ればそれは又してもあの死んだ男  
もう何度これを繰り返しているのか  
「こんばんはおじさんあなたは誰」  
少年は遂に意を決して男に問う  
「こんばんは私はきみの運命だよ」  
男は意外に穏やかにそう答える  
気づけば死んだ男は既にもいない  
少年の姿も気づけば見当らない  
灯下にはただ一人の生きた男  
己が何故そこにいるのかももう  
知ってしまった一人の若い男  
さりとしてどうしていいのかはまだ  
分からないがそれでもいつか遂に  
己がなすべきことを必ずなす  
それだけははっきり分かっている  
一人の重厚な男が一人で灯の翳に



三浦 逸雄 「犬のいる家」 20号 油彩画（麻布） 2018

「戦後五〇年、こんなに民主主義が根付かないとは思わなかった」…とは、丸山真男の嘆息ある感想である。なぜ民主主義は根付かなかったのか。その一つの重大な要因として、無責任構造ということがあり、その無責任構造は会議体ということと深い関連があるとの見方から、少し考えてみた。

責任を取らない。何か失敗があったとき、下のものは上のものの責任を追及しない。上のものはその上のものの責任を追及しない。こうした「無責任の構造」は、「成行き任せの体質」と並ぶ日本人の特徴である。

「成り行き任せの体質」とはどういうことか。戦争に負けて三日後くらいには「日本は負けると思っていたよ」と口々に言い出し、一か月もしないうちに「民主主義なんだぞ」といい、進駐して来たアメリカ兵に媚を売るような言動をわれ先にする。これが「成り行き任せの体質」である。小泉内閣の下で自衛隊を先遣隊としてイラクに派遣することになったとき、世論調査では大半の日本人は反対だった。それが先遣されてしまった後では、賛成派が多数となった。これが「成り行き任せの体質」である。この体質は日本人の重大な特質であろう。しかし今回はこの問題を伏せつつ、無責任構造に絞って考察してみたい。

今次の大戦の責任でも、最高責任は天皇にあることは間違いない。天皇の側近中の側近であった木戸幸一は、「（この戦争の）責任は天皇にある。よって退任すべきである」と言っている。しかし天皇は責任を取らなかった。これが日本社会の構造を象徴している。昭和天皇は責任を感じていただろうか。内心忸怩たる思いはあったかもしれないと思う。しかし責任を具体的なかたちで取るほどにまで悩むこともなかったとすれば、その原因の最大のものに「会議」というものがあつたと思う。「御前会議」すべてはその決定で遂行されたのだ。確かに御前会議の最高責任者ではあるものの、自分は軍の意見、国民の総意に従ったまでだ、そういう言い訳がたやすく出来た。そこに会議というものが無責任構造と結びつく典型的なかたちを見る。

木戸幸一はその御前会議の推進者の一人として、運営委員長的立場にあつた者であることを忘れてはならない。その責任の取り方を「退任すべきだ」と言っていることも注目しておく必要がある。職を辞す、退任するといったことで、すべての責任を取ることができるという「無責任構造」を追認していることになるのだ。

「会議にかける」「会議決定だから」といえばすこぶる重い意味をもつのが組織の常である。しかしこれこそ無責任体制の典型的な姿ではないか。或る大学においては「教授会決定」といえば、実質的には最終決定であるにもかかわらず、これを常務会（学長、常任理事によって構成され、毎週定期的に開かれる）に諮り、さらに評議員会（卒業生および学内から選任された評議員によって構成され毎月定期的に開かれる）の承認を得てはじめて最終決定となる。このことは権威付けの意味もあるいっぽう、責任の処在を曖昧にする。どこに責任の主体があるのか不明になるという「無責任構造」を形成する。

個人が責任を取らない、そのいっぽうで組織内の各個人は会議決定に従うことが絶対の使命となる。つまり個人が「組織に殉ずる」構図に結びついてゆくことになる。会議体という一見民主的に見えるものでありながら、かえって民主主義が根付きにくい状況を作っているという皮肉な構造が見えてくるのである。

かくして組織の事務方は会議に次ぐ会議ということになる。会議にかけなければ何一つ前に進まないからである。偉くなればなるほど朝から夜中まで、会議ばかりやっていることになる。世の役職者、議員という存在は会議をするのが「お仕事」である。

世の事務方という者、その会議の資料を作り、エライさんに連絡を取り、出欠を確認し、食事の準備をし、会議室と駐車場の確保に齟齬のないように気を配り、会議終了後はその記録をまとめ、それをエライさんに眼を通してもらってから配布し、また次の会議の準備をするといったことに毎日明け暮れているのだ。

モノの生産に携わる人たちは、まず会議など無縁である。農民、労働者、職人、技術者等々、これらの人たちにとっては会議などやっている暇はないのだ。会議をしてきたのは、古くは貴族階級にはじまって特権階級の儀式に近いものだった。武士階級も定期的に登城して、会議に臨んだ。明治にいたって、「広く会議を興し、万機口論に決すべし」という有名なスローガンが出る。大勢の人が寄り集まって、皆で何でも決めようではないか、というすこぶる明快で分りやすい「お達し」である。

その通りに実行されていれば、わが国も民主主義そのものとなり、今ごろになっても民主主義が根付かないなどと時代遅れの嘆きをしないですんだはずだった。明治政府をはじめ広く会議を興したのはよかったが、その会議たるやそれまで永く伝わった権威付けの会議にたちまち墮していったらしい。

ホワイトカラーのサラリーマンがはたして特権階級と言えるかどうか分からないが、とにかくやたら会議がお好きなことは確かだ。会議に次ぐ会議、そしてその会議の必要からまた新たな会議を作り、委員を委嘱する。そこで役員と名のつく人種はほとんど関係がないような会議にも引っぱりだされ、あちこちに出かけてゆく。

朝、秘書からその日の日程を知らされる。車に乗せられて、会議場のある建物に着く。お抱え運転手にはサンドイッチと飲み物が配られ、車寄せで待機するよう指示される。案内されて会議場に着くと、いずれもどこかで会ったことのある顔ぶれが居る。会議前の話題は健康に関するものが圧倒的に多い。

目の前にはすでにその日の資料の書類が置かれ、仕出し弁当が置かれお茶など用意されている。その日の会議のまとめ役が席につく。

「どうぞお食事を召し上がってください」の一言でいっせいに弁当が開かれる。食べ物の話がでたり、ゴルフの話になったり、和やかな雰囲気である。食事が終わった頃合を見計らって、会議が始まる。

「前回の会議記録がお手元に行っていると存じますが、それについて何かありますでしょうか」出席者全員沈黙。

「何もありませんのでご承認いただいたものとします。それではさっそく本日の議題に入らせていただきます。まず第一議案についてですが、資料の一をご覧ください。担当者に説明していただきます」ここでその資料の作成の責任者である事務方がごく懇篤な調子で説明する。この資料は数字が羅列してあったり、グラフがあったり、一見何のことが分からないのが普通である。そこへ事務の説明がこれまた何について言っているのかさえよく分からないような、すこぶる不明瞭な言葉が続く。

ここで明快な説明をすることは可能である。しかし出席者全員がよく分かるような説明をすると、必ず「素朴な」質問が出たりする。するとそれをきっかけに、話が思わぬ方向へ進み、わけもなく「紛糾」したりすることがある。こうなっては拙いし、事務方の能力を問われることになる。何も質問が出ない、出ても当たり障りのない答えで済むようにしなければならない。説明は長すぎず短かすぎず終了する。

「有り難うございました。ただいまの説明にご質問はありますでしょうか。・・・なければご承認いただきたいと思います」全員沈黙。

「有り難うございました。ご承認いただいたものとします。では次に第二議案でございます」

こんな調子で会議は進められてゆく。こんな会議が全国のいたるところで毎日行われているのだ。すべてがこんな調子だとは言わないが、大方はそんな調子だといって差し支えないと思う。

こうした会議の結果はどうか。何もなければまだましかもしれない。しかし何もなくてもそうした会議には莫大な公金が使われており、人的資源も無駄遣いされている。しかもっと重要なことは、言うまでもなくこうした会議によって、大きな方針なり予算配分が決められてゆくことなのだ。

そしてこうした会議の積み重ねの結果の挙句の果てが、「戦争」だったり、「経済の崩壊」だったりするのである。権力者というものがはっきり特定されていればまだいい。しかし建前はあくまでも民主主義なのだ。会議の決定によってすべては推進されているのだ。会議の出席者の誰も責任は取らない。責任を取りようがない。お膳立てをした事務方ももとより責任を取る立場にはない。

しかしその会議の取りまとめ役と、事務方とは常に共同歩調を取って議案を作り、会議にかけて承認を得ている。演出者は事務方である。演出者は、同時に裏方であって責任を取る必要はない。いっぽう役員は朝から日程がぎっしりつまり、すべて秘書の言うなりに動いてゆく。最高管理者は、最高に管理されている者でもある。会議に出れば、まとめ役と事務方の意のままである。

民主主義の象徴である会議というものを、端的に描写してみればこのようなものであろう。それが図らずも無責任の構造そのものであることが見えてきたと思う。しかもこれは権力の構造でもあるのだ。責任もなければ、所在もはっきりしない「会議決定」という権力によって、日本の国が動かされてきたし、今も動いている。（了）

## 第十一章 (その2)

私は自然に周囲五百メートルの電話網技師になりました。電話線を解明しなければなりませんでしたし、隣の部署も屢々修理しなければなりませんでした。間もなく私は驚く程に規則正しい敵の一斉砲撃を体験しました。平静な地形とは別に、もう一つ非常に危険な地域がありました。私たちの部署の様に完全に砲撃を受けない一画も又、幾つかありました。でも、そこから四メートルの処でも決して安全ではありませんでした。百五ミリ砲の時限弾が屢々私たちがいた界限の上空で爆発しました。しかしそこには無害の残骸しか落ちて来ませんでした。閃光は再び現れません。でも、そこを避けなければなりませんでしたし、殆ど何時でも可能でした。この種の数々の作戦区においては、新しい人々がやって来ますし、通りがかりの人々が殺されることもあります。私たちにはその実例が毎日ありました。語られた実例も幾つもあります。ひゅるひゅるという音が僅かにしても腹這いになります。何も見えません。私が動き回るのは、お分かりの様にすっかり静かになる朝の時間を選びました。部署の周りの仕事を私は屢々歩兵隊の中尉と協力して行いましたが、数ヶ月後に彼は殺されました。彼は電気関係の専門家でした。しかしながら電話のことは私と同程度でした。その彼は何時私を「ムッシュー」(あなた)と呼び、階級のことは決して問題にしませんでした。一番困難な私たちの仕事は、砲弾の穴の中で切れたり見失ったりした電話線を発見することであり、携帯用の電話でテストをすることであり、接続を回復することです。彼は勇者でした。ところが砲弾がやって来ても不潔極まりない泥の中に身を投げて横になりませんでした。私はやはり泥の中でした。私たちの唯一の相違というのはその時に、私の様に侮辱された態勢を取ったことと、彼の様に絶えず敵を罵っていたことでした。私は何も言いませんでした。この素敵でな人物は、見ていると私は何時も感じが良かったです。彼は私を、神が知っている場所へ先導してくれた様です。大変幸せなことに、その仕事は私にぴったり合っていました。私の仲間の連中もいる彼の主要な部署では、電話が目立った理由もなく鳴り始めました。私たちは協力してその音を追いましたが、空しいものでした。しかし、私はこの種の電話機をその様にして学んで覚えました。私たちは電話機の内部を見ることは出来ませんでした。熱心に細かく調べなければなりませんでしたし、何ら頼るものもなく腕を働かせなければなりませんでした。この労苦は想像することが出来ません。私たちは順番にその仕事を始めましたが、一回で二、三分でした。部署では同様に勇者たちの水の小樽を一つ発見しましたが、それをブランデーと呼んでいました。私は壺に一杯入れる様にしました。そして、この様にして如何なる種類の勇気も私たちには忘れられませんでした。

私たちの生活は、小さな船の乗組員の生活に似ていました。一人ひとりの能力は、行う術を知っていることに正確に依存していました。そして、その熱意は誤りの無い正義を生んでいました。この〈無線技士〉は、自分の仕事においては優れた職人であり、黒鷲の様に陽気

で皆を助けていました。今度は彼のことを語る番です。誰もが砲兵中隊の馬と共に一日だけ大目に見て貰える日がありました。彼らは好きな時に戻りました。私は不定期の休暇を真剣な表情で彼らに告げました。彼らのうちの一人は私の書類を備えて、家族がいたナンシーまで行きました。彼は大変遅くなって戻り、沢山眠りました。その後で、誰かが彼に何かを要求する間もないうちに彼は二倍の働きをしました。この管理方法を何処まで当てにすることが出来るか、私には分かりません。これは明らかに未来に向かっての一つの見本です。少なくとも実際のこの自由は、自分の手腕と気に入っている仕事が前提となっています。そして一般的には厳しい強制に基づいて行使されることを忘れてはなりません。私はこの班を選抜しましたが、最初は仕方なく集められた人々の間で、私が私自身であった様に、恐るべき権力に従順でした。もしも自然がその様に一種の継続した嵐によって人間たちに影響を及ぼしたなら、自由な人間たちによって一つの共和国が見られることでしょう。余りに恵まれた気候が、一種の自然の果実の様に、専制政治を生むと理解されるのもこの間接的な方法によつてです。これらの思想がその時に自然に私にやって来たのは、私の目の前に類い稀な上官がいたからです。彼はメロン号という名の軍艦の艦長で、陸軍歩兵隊の要請でやって来ていました。彼の監視用の電話機は有名で、彼自身も疲れを知らずに大胆に仕事をしました。捕虜たちの話によると、ドイツ人たちは彼に「黒い悪魔」という渾名を与えていました。そこからもお分かりの様に、彼は暗色の軍服を着た儘でいました。彼自身は真面目で言葉少なで、海軍にいる時の様に誰に対しても完璧に礼儀正しかったのです。そして私は、例えば砲弾のひゅるひゅるという音に首をすくめても、彼が恐怖の仕草を表すのを決して何ら見たことがありません。彼が集めた土木工事人の中に、シャベルの名人であるジャンナンがいるのを私は認めました。そして再び満足して格式張ったジャンナンは、私を表敬訪問しました。彼はその日の仕事を迅速に終了した処でした。でも、上官は彼を倍にして働かすことはありませんでした。軍隊の仕事がゆっくりとして怠慢であるのは事実ですが、それは一つの仕事が終わった後に、もう一つの仕事があるのが十分に分かっているからです。そして、別な風に行動出来ない必然性が殆ど何時も説明されているのです。しかしながら息を抜くために日中の僅かな時を自由に使う術を知る者たちは、結局のところ恐らく労働も同じ様に活発で創意工夫に富んだものになるのです。どの様な産業もその点について熟考しなければならないでしょう。しかし、戦争という産業は屢々ひっくり返されて怒鳴りつけられます。

私は間もなく、もう一つの別種の仕事に苦勞しました。命令は、避難所の用地と大きさを調べることから、無線技師たちのために深く研究することまでに達しました。私は又、建築技師の仕事も学びました。そして正確な計画を立てました。その次に、私たちの班だけという方法で避難所を建設する様に告げられました。私は議論しようとして試みましたが、私の言うことは聞いても貰えませんでした。工期が短かったのです。迅速に丸太の交換が行われるのが見られました。我々の危険な小道を三回ばかりそれらの丸太を迅速に運搬しなければなりませんでしたが、それも最も暗い夜でした。私は仕事の分担を行いました。私には今でも右肩にその時の痕跡がある様です。地面に身を投げ出す時には疑問が無い様に、如何なる方法でも自らを守る時には疑問が無く、恐怖による動きに殆どが取り消されれることを私はこの



話をしているうちに気が付きました。私は、我が軍の左側の良く知られていた爆発を記憶として思い出しますが、私たちは雄の驃馬に乗るやり方と同じに肩を使って登っていたので、殆ど麻痺していました。掘らなければならない作業が生じました。やがて岩が見付かります。鶴嘴の先を使いました。私は軍の建築現場の決まりを思い出しました。それらの決まりを一つに纏めた後で、私は自分自身が鶴嘴で掘る様にするのを勉強してから、その日の一斉砲撃についての報告を急いで清書しました。私が戻った時は道具しか見付かりませんでした。私は無言でいましたがそれで十分でした。しかし、私はその時に自分が上等兵であることを感じました。その避難所が掘られて覆われているというのは事実です。そして、私はそこに電話線を運ぶ時に、ピクリン酸を含む強力爆弾の最も大きな爆風を受けました。正面に良く知っている風景と森を見ながら、私は斜面を背にしている時に眼の前で一〇五ミリ砲が爆発したのです。数々の爆発音も納まりませんでした。しかし私は振動と空気の平手打ちの様なものを感じました。私はそれ以上長く覚えておらず、幾つかある金網のベッドの一つに横たわって長いこと眠っていました。茫然自失状態は夜まで続きました。この一撃が不幸を齎したことを私は知りました。歩兵隊の連隊長の避難所では二人が亡くなりましたが、彼らは枝で伸ばされていました。私は少し大きな動揺を感じるばかりでした。同様のことはボーモンでも私に起きました。その時、私は恐怖で茫然となっていたと思います。しかし、このもう一つの経験に倣って私が仮定するのは、活動の規定はまさに恐怖の下にあるということです。その結果には一種の相違がありますし、観念の蒼白さもありません。その一方の人々には、人生に対する愚かさが残されています。私はここに考察のための場所を見出しましたが、それは私が一軒家を持ったエーヌ県の村であるペシーで、私に語られた考察でもあります。しかし、その時の私は大戦を経験していませんでした。村の人々はその地方の深い穴の中に避難していて、長い間そこに止まっていた。そして子供たちも生まれましたが、一人も生き残りませんでした。医者が説明した処によると、それは柔らかい心臓を締め付けたり歪めたりする採光のせいであるとのことでした。

私は、偶然に居住者になったこの第二の村に戻ります。この場所において、私の周りを有益な天才が回り始めました。彼は第十四砲兵中隊の若い大尉で、時々命令によりやって来ました。大変に勇敢で、大変に陽気で、直ぐに私をムッシュー（あなた）と言いました。しかしながら彼は職業軍人の将校であり、T大尉の学友でした。そこから彼は私がいたのを知っていましたし、私を発見しました。私は彼によって、予備役将校で通常はチェックのズボンを穿いて麦藁帽子を被っている中尉の彼と知合いになりました。中尉はそれでも非常に善良で、奔放な弾着観測将校でした。その連隊はタルブ連隊でした。南仏のアクセントで部下たち全員の中で歌っていました。私の班にも二人おりました。そのうちの一人はフォルテユネという名前で、まさに最も哀れな人間でした。若い大尉に関して言うと、彼は私たちの小石や泥の中に宮廷の流儀を持ち込みました。彼は私を、少しも快適で無い彼の監視所へ一度昼食に招待してくれました。ところが取分けその往復は平静ではいられませんでした。溝が一本ありました。それにも拘わらず大変に目を楽しませて花々が咲いている森の中では、溝の横を歩くのが習慣でしたが、そこではつい最近に伐られて、切り株から幾らか離れた処に投

げ出された一本の樹木を私は見ました。そして、それは花束の様に鮮やかでした。これらのものは溝の中から飛び出したい気にさせましたが、私はその滑稽さを恐れました。食事の時に、私は他の処で話をしたことがある施設付き司祭のアレルを見付けました。室内遊戯は、私の判断力を心配していた、謙虚で内気なこの人物を困惑させることになりました。私は彼を英雄扱いしなければならない様に扱いました。しかしながら彼はそれに関心を持ちませんでした。彼は馬鹿と見做されたくなかったのでしょう。彼は大学教授でもあったということです。自由な教授の目には大学の威光が如何なるものか想像されません。私は最早そのことを考えることはありませんでした。しかし大尉と中尉は、彼に満足していましたが、この英雄は恐怖で死にそうに違いありません。文学サロンが何であるのか人は見抜きます。クロードルの戯曲『人質』は私の蔵書の一冊でしたし、今でもあります。大尉は休暇の時に読む作品を考えて、同じ作者の戦争詩を私に語りましたが、それは私に嫌悪を催させました。この『人質』という本は、私がポーモンで抱いた文学的慢心という言葉思い出します。警報が鳴り砲弾の音が聞こえて来ると、私はこの本を腕に抱えていました。私はゴンティエに言いました、「早く戻ろう。もしも『人質』を腕に抱えて殺されたのをバレスが知ったなら、不名誉なことになるだろうからね」。しかしながら、この言葉は本当の感情に一致しています。それ故に私は引き合いに出したのです。そして、以上は砲兵たちのサロンの口調でしたし、そこでは歩兵隊の将校で大学教員でもあるマッソン教授を決まって私は見たのです。しかし、彼は数日後に殺されました。私が大変はっきりと聞いたのは、その日の夜に七七ミリ砲の一斉砲撃が二回あり、一回目は彼を避難所から引き出し、二回目に彼を殺したということです。新聞では、彼はアルゴンヌ丘陵で殺されたと書いてありましたが、そこからゴンティエは警句を言いました、「文学者はヴァーヴル高原では殺される筈がない。アルゴンヌ丘陵ではもっと殺されないよ。あなたに相応しい場所はどこではないからね」。

私には毎日、電話線の先にゴンティエがいました。私たちが、電話機の中で声が良く発音されていて私たちの優れた単一アースの結果を確認するのは楽しいことでした。私は採石場の避難所の中でも二、三回それを体験しましたし、一日の休暇中の間にしろ、休暇が始まったり戻ったりした時にしろ、ミノルヴィルにいる時でもそれを体験しました。（完）

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

釋自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

アラン『大戦の思い出』（十三）第十一章（その1）：兵士は上官の命令に従わなければならないけれど、上官の人柄によって大きく左右されるものだと思います。大尉は自分の暇つぶしに、涙の出るような仕事をさせて兵士を支配していることなど。電話から、戦争の現状や見通しを知ることが出来たこと。司令官たちは、複雑な仕事に足場を置かなかったこと。ベットが揺れていても兵士は、消耗しないよう眠っていたことなど、体験者でなければ分からないことを知ることが出来ました。

丸山真男追想：丸山真男のことを知りませんでした。深く教えていただきました。

三浦逸雄の世界（三十一）「白鳥が来る地」：自然が豊かな北海道には、白鳥が来る地がたくさんあるんですね。一生懸命、幸せの使者が飛んでいるようです。

諺辞典（一）：よく聞いていた諺でした。両親を送った今は、夜明かりをつけて爪を切っています。

幸福の味を守るもの：難しいけれど、愛と信念をもって疑うこと。意志を持った行為から喜びも生まれ、幸福の味を守れるのだと思います。

怒りの自画像：バスキアの自画像を見て、詩が分かりました。「黒人のピカソ」と言われるのをきらっていたそうですね。天才なのに薬物に溺れて27才で命を落としたとか、惜しかったと思いました。

花はポトリと：決断力に欠け、一日伸ばし、優柔不断のわたしです。椿がポトリと落ちる3連目が新鮮でした。終連が好きです。

死灯が見えた：七〇一号室、病をおして家族に支えられての師の講義。師に死灯が見えたなかでの、尊い民俗学の熱い講義だったのでしょう。師を思い遣る心が沁みてきました。

六月の授業参観：現代っ子の様子が見えるようです。「千年の釘にいどむ」白鷹さんの生きざまは、立派だと思います。最終連に拍手を送ります。

マグマ：4連目の「目に映るもの全てがカエルに／醜いガマガエルに見える／あなたの目が／...／蛇と化し始めている」というところに共感しました。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第48号

2018年7月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/122744>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122744>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト